歸雲禅

土佐改田

竺貫三編

特別
へ5
6590
6

へ5
6590
6

辞世　　肅月葬七十七度

大系乃三のりみ山ま〜はくくも　仰善
絶て秋それわ者何ろ門さの花

○

咲をやら〜何字よ如り花

咲をやら〜何字ろ帰り花　生七才　貫之

きくよ有〜後ろ〜神もしらく

新ちまようけるさうに為積て　父宗貞　柳

大系伝り下略

きくの顔を賞ちりく

生去必滅とちて知るる人情
の移りさきいの秋なく〜ち〜文
政元年の冬神子月末の写れ日乃先
子の時仲冬晦日月落ちまの去乃字
の影なるに咲ち化祝つきあけ去を

掃して彼の塗に葬れぬる石のうへさ
様々よあなしそれと今玄定龍の寂
しあわせ多の花めるをひして初め
ゑ恩を謝せんと猿起て碑前に漫
うち残ひ種より公爪石ねしたりく

涼しき其の名もしむ心や塚の前　雪志庵 貫三 拝

日向宮 西中勝

浄土まで探ね清し月あかれ、　保定 鳥羽園 三四坡

きえぬ名のうつくしき雪佛　萱田 越山

この他をおもふ百年も静かなり　甘昌

笹嶋のそれも後家に寄る哉んて夢　言志

清きん世紀極楽に置る哉ぬ英

公爪のうきまゝしと空ての桃　安山居 公亀

茶をたてなくさめん妻の名残　言志 帆南

○

和請

姿婆の化塚乃かきりあれはや
護桜みた下よかけ紙かくし佐
岩ふこ倉の花を置きてよ
ふ折咲乃ひや加留し鉢　至 雲山

居従矢のこしとゝやなの阿字乃
ちなしゆりまし中小勝居と思しは
柏とかしむれいさや手ふゑん小祥忌と
なりわれ禅家に到り墓をともなひ音
花を捻け続首しく

露の玉や石もみいきん出と聞り　賞三
棒

嘯月菴仰言と人家の路鋭山と言
と辞して哀なる大峯山の僑に業の
居を営み居まふるゝ文政己丑の冬
この玉を辞しきひてよかなふやそれ
大祥忌に当り法筵に余もつらなり
僑花の言葉を慕ひ我偶を贈

宜向と手に猶りて

記念とも作くや塚の時雨　也柳

揺しくれ去年みれ月乃恩　巴之

三羽四羽丑任那曾ん鷺むれて　里正

沫まけのりの門もれこのく　菜石

草城色へ入月乃岸をときさそれ　鯨古

しのとを新むせ中茶塚　め留女

本渡りしぬ桜子にかのふく　三巴

えの葉深き私家乃三神　清嘯

真心しま喜びなし泳白如也　寿石

庵風和へるもまぎれぬ時雨哉　竹化

梅の花多やかおるゝ夕暮れ　設居

深夏おるゝ西乃明月　櫻高

まゝ二人り相ひよりて乳もうれし　松二

太雄分り一作

冬籠

月よ明日——宗祖の小袖の車　改四月　設居

淋色にうるゝ時雨より夕べ　篠石

毎日新やをさ深雪も毎日　星正

蝶相——や毎朝ゝ小長刀　設古

鶏の雛をさうて毎日　如雲

数乃鶏の振数　櫻安

夕月をおそ〳〵白——おもの菊　清爾

埋火や家の鶏〳〵尾の世界　三巴

猫り庵や西所家を猫を友　竹化

ゆる雨と老毎年ゝ　秀石

吹ゆけて雨よりわれ枯野　松二

遊加

金屏風に霧に霞と竹のしらべ　五山堂　真池

一すの竹に霧のあしらうみ　田村山人　三園

竹門やこの竹けるこの竹ひ流り　信夫　紀雪

けるれいのしらべとこやしらべ

古郷の大和恋よあちらに吾る面乃

秋吟を恵うに金もかねてそ家

乃家よ霧をそらひ踏躍しらべ

の間より出り九年ゝ一毛なら

秋花を持け経ゝ秋首面あて

塚をしらべそこ見りの霧乃花　春之　揮

文面

第一の文北国よりとゝ乃年乃稿　湖園

春やけの二月樣てかゝり花　京　煙吹

○

笠義背ゝ蒔もれもの事

みゝこゝ里　深風舞